

# 新年を迎えるにあたって

茨城県知事 竹内 藤 男  
茨城県統計協会総裁



明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、皆様の御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げますとともに県政に対する御理解ある御協力に対し、深い感謝の念を捧げるものであります。

私も昨年知事に就任以来8カ月、明るい郷土を創るため、精一杯努力をいたしておりますが、今更ながら茨城県がかかえている問題の複雑さ、難かしさというものをつくづく痛感いたしております。

すでに昭和も半世紀をこえ、これからは高度成長はのぞめない時代に入ったのだといわれております。県財政もかつてない事態に直面しており、しかも県民の行政に対する要請は、ますます多様化してまいります。これに応えるためには、思いきった発想の転換をしなければなりません。そして、ここでじっくり腰を落ちつけて、目先にとらわれることなく、  
・ ・ ・  
こころと物の調和した真に豊かな県民生活を実現するため、地味ではあっても一步一步前進するよう、懸命の努力をいたす所存でございます。

昨年はいみなさま方の御尽力をいただき実施されました農林業センサス、事業所統計調査、国勢調査等の統計調査結果が、郷土茨城発展の指針として重要な役割を果すことでしょう。私も全力をあげて県勢発展のためがんばりますので、どうか皆様におかれましても、統計が社会に及ぼす影響の大なることを認識され、今後とも格別の御尽力をたまわりますようお願いいたします。

今年5月には、天皇、皇后両陛下をお迎えして「緑を育て守ろう大地」をテーマとして、全国植樹祭が本県において開催されます。県民の心をこめた緑の祭典にいたしたいと思っておりますので、御協力を重ねてお願いいたしましてごあいさついたします。

# 新 春 ご 挨拶

全国統計協会連合会会長 有 沢 広 巳



あけましておめでとうございます。皆様それぞれに佳き新春をお迎えのことと存じ、ここから喜びを申し上げます。

新しい年を迎えて、それぞれに期待するところがあり、それを現実のものとする自信と抱負を持っておられることと思います。しかし、こと統計に関する限り、明けた昭和51年がどのような年であるべきか、何が為されなければならないかについての認識は、必ずや同じであろうと信じます。少なくともここ数年間、統計人は、多くの課題に直面し、必死に暗中摸索し、依然として曙光を見出し得ないままに歩み続けてまいりました。現代のごとき探索の時代にあっては、人間社会のあらゆる構造上の実態をとらえられる一つの科学的方法としての統計に、大きな期待が寄せられます。特に、昨今のごとき物価や景気動向に世人の注目が集まり、それらに関する統計が経済諸施策の直接的基礎となっている場合において然りであります。したがって、各方面から、あらゆる社会活動に関するより広範で精緻な統計の整備が求められてきました。しかし、他面において、これらの要請は、わたくしども統計人に対し、より一層の労苦を求めるのにほかならないのであります。な

ぜならば、統計調査なくして統計は存在し得ず、統計調査を担うものなくして統計調査の実施はあり得ないからであります。しかも、既に明確に認識され、指摘されているごとく、今日、統計調査環境の悪化は、きわめて深刻であります。今日のわが国の統計は、私がかって断言いたしましたとおり、第一線で統計調査を支える者の犠牲と忍耐によってからくも支えられているのであります。

無論、わたくしどもは、決して坐して百年河清を待つのみではありません。統計調査活動の危機を叫び訴え、共鳴を求めつつ、黙然として果たすべき使命をやり遂げてきたのであります。これらの忍耐と犠牲は、かって申し述べたとおり、統計を愛する心、統計に対する純粋性によって、支え励まされてきたものであったと信じます。だからこそ私は、皆様の統計人としての誇り、真の統計人がもつ高貴な精神に訴えてきたのであります。

陽光にかがやく日々を待つ新春は、志をたて、決意を新たにするにふさわしい時であります。紅顔の少年のごとき純粋さをもって、もろもろの困難を克服するための統計への一層の献身がそれぞれのところに誓われることを、皆様のご健康を、ふたつながらにここから祈ってご挨拶いたします。

## 遊びも結構、統計調査

前通産省工業統計課長 田原 昭  
特許庁審判長

「こんど、工業統計の仕事をしてもらうことになった。」

上司からこう言われたのは、三年前の初秋のことだった。

「課題はいろいろあるぞ。第一に都道府県との関係の円滑化、第二に工業統計表の着実な刊行、第三に……」

——コウギョウトウケイヒョウ？ 聞いたことがない名前だ、いや待てよ、役所の書棚の隅っこに、そんな名前の薄汚れた資料が立ててあったのを見た記憶があるぞ……

統計と私との接触は、こんな情ない状態から始まった、実際、統計調査について私は何も知らなかった。

○ ○

一年ばかり、私は無駄な手さぐりを繰り返した。私が乗った列車は、「国境の長いトンネル」をなかなか抜け出ようとはしなかった。それでも、月日を重ねるうちに少しずつ勝手が分って来て、知らぬ間に統計調査の魅力に取りつかれていた。

統計調査の仕事は、本来楽しいものだと思う。地味だとか、すぐには役立たないとかいった批判の雲が、統計調査の魅力をおおい隠してしまっているのではないか。腰を据えて取り組むに値する仕事だ、と私は感じられた。

「どうだい、統計の仕事は？」と役所の友人から聞かれるごとに私は「うん、結構おもしろいよ。」と答えた。風変わりな奴だと友人は呆れ、苦笑いをしていた。あるいは憐れみの微笑だったのかも知れない。

なんでもよい。私は嘘を言ったわけではなかった。工業統計調査に限ってみても、全国に配った調査票が都道府県を通じて集められて来て、具体的な数字に固まって行くのを目撃するだけでも張合いのあることだった。また、ポスターを公券した際、心をこめた作品が全国から何枚も送られて来たのも愉快なことだった。

さらに、統計調査員の方々の注文が都道府県を通じてしょっちゅう伝えられて来た。これをできるだけ実現しようとする知能を傾けるのがまた楽しかった。注文は実にさまざまだった。いわく、年末年始の忙しい時期の調査は困る。いわく、雨や雪に濡れると破れるような調査員用手さげ袋ではダメだ。いわく、商品ごとの分類番号をつけた「五十音索引表」を早く作れ。いわく……

これらの要求にどのくらい応じられたかは分らない。ただ、限られた「予算」の壁を切り開いて問題を一つずつ解決することは、統計調査の最前線で奮闘しておられる方々のご苦勞を少しでも軽くすることになる——こうした思いが、私にゾクゾクするものを味わわせ、力を与えてくれた。

統計調査の仕事はおもしろいものであると同時に、やり方次第によってはいくらかでも愉快にやれるものだと思う。つまり、「遊びの精神」を発揮する余地が大きい分野なのだ。「いろはがるた」などはその適例であろう。

昨年の初夏、私は文部省統計数理研究所の鈴木義一郎氏の講義を聴いた。氏は、自作の「統計学いろはがるた」をテキストに用い、むずかしい理論をわかりやすく説明された。笑い声も時々もれ楽しい講義だった。テキストの一部を抜き書きしてみよう。

- ㊦ にひるな 脇役、統計手法
- ㊧ たからくじ買はは確率知らぬ人
- ㊨ 相関をうまく使って回帰予測

これだと私は思った。うちあけて言えば、統計学の知識が工業統計調査に不可欠だとは私は思っていない（鈴木博士よ、ごめんさい）。しかし、この「いろはがるた」の精神は、限りなく貴重だ。こうすれば知識も正確になるし、記憶に刻まれて忘れにくくなる。よし、この精神をそっくりいただこう。数日かかりで、私は「工業統計調査いろはがるた」を作った。

- ㊩ 労働調査が最初のすがた
- ㊪ 統計の仲間が支えた六十年
- ㊫ うるさい府県は貴重な府県
- ㊬ 年末調査に批判あり etc……

とにかく、統計調査の仕事は、額にシワを寄せた陰気な顔で取り組むべきものではなく、冗談を言い合い、朗らかに笑いながら処理すべきもの——いや、処理できるものと思う。「愉快にさばく統計調査」「笑って覚える統計調査」が理想のすがたではあるまいか。「遊び」が必要なのは、何も自動車のハンドルだけに限られない。

○ ○

最後に、統計調査も人目をひく方法をさらに考えるべきであろう。「統計は地味なもの」という既成概念によりかかっていたのでは、飛躍は望めない。この点で私は丈夫で長持ちのする調査員用手さげ袋を作ったり、すぐれたデザインのシンボルマークを開発したりした先輩諸賢に脱帽する。また、「統計戯曲」を書き、その中に清水次郎長、大政、小政などとともに杉亨二先生（わが国官庁統計の始祖）を登場させた先人のアイデアに敬服している。

「KJ法」で有名な川喜田二郎氏は、「現場の経験なるものこそ、まさに新しいものを生み出す真の力の源泉である。」と、味わい深いことを述べておられる。統計調査の「現場」で骨折っておられる諸兄姉によって、「統計調査にスポット・ライトをあてるアイデア」がこれからも生み出されるだろう——私は、それを期待し確信している。